天上院光は財閥令嬢である。

　自分が人の上に君臨する事は、持って生まれた使命で、相手が服従するから当然との考えがあった。

　故に他の学生のように自転車や電車、徒歩で通学したりはしない。

　自家用車に使用人付きの送迎なのだ。

「光様、お迎えにあがりました」

「ふふ、いつもご苦労様、翡翠」

　校門に止めた黒塗りの車。

　そこから出てきた光より少し年上のスーツを来た少女は恭しく光を出迎える。

　素早く開けられた後部座席へ光は当たり前のように乗り込む。

　扉を閉めると、少女は素早く運転席に乗り込み、車を走らせた。

　滑るように発進する車。

　シートに深く腰をかけながら、窓の景色を眺めていた。

「うっぐぅ……」

「光様、新しいシートの座り心地は如何ですか？」

「悪くないわね。デコボコがなかなかいいわよ」

「ぐぅぅぅ……」

「ちょっと音が雑音が多いわね」

「後で修理しておきます」

「構わないわ。ただ座ってあげているだけなのに、それすら耐えられないなんて、出来損ないの『小人』らしくて笑えるじゃない？」

「ぐぅぇぅ！」

どこか残酷な色を孕んだ微笑をうかべなから、光は背もたれに深く背中を預ける。

1人の小人を文字通り尻に敷きながら。

全てを与えられた光にとって、男とは出来損ないであり、欠陥品であり、支配すべき対象。

そして、その欠陥品がさらに社会の役たたずに縮んだ小人など、もはや虫ケラと同じだった。

これから生きていてもなんの社会に貢献することもない哀れな存在。

そんな存在にこうしてストレス解消の道具として使ってやることで、存在価値を与えてやっているのだ。

日本を牽引する財閥のトップに立つ天上院光のストレス発散の道具としての役目を。

本来なら傲慢とも言える思い上がりだろうが、女性上位社会では光のような考え方は珍しくなかった。

光の尻の下に敷かれている小人は付き人である翡翠が裏サイトで購入し、光の玩具として用意したものだ。

小人が可哀想など彼女の中には欠片もなく、購入時も小人に対し、

「無価値に生きる貴方が光様のお役に立てることを幸運に思いなさい」

と告げたのだった。

◆

ーーいい座り心地ね。

光は尻の谷間に小人を挟みながら笑う。

やっぱり、小人を苦しめていると日々のストレスが和らぐわ。

ミシミシ。

うぅぅぅぅ！

パンツの布地越しでも小人の呻き声が聞こえる。

マミーのように布地がピッタリと張り付き、小人は身動きをとることすら許されない。

出来損ないとは言え、元は人間だったものだ。

それを尻1つで支配していると思うと実に面白い。

ただ座っているだけなのに、小人はそこから逃げることすらできないのだ。

なんて弱い存在なのかしらねぇ。

光は口元に対して哀れみを抱くも、男であれば仕方ないか、と思いながら軽く両足を浮かべた。

結果、お尻に全体重がかかり、さらに小人がお尻の谷間にめり込んでいく。

ギュゥゥ。

「ふぐぅぁぁぁぁぁ！」

小人はたまらず悲鳴をあげる。

「あらあら、そんなに喜んでもらえて嬉しいわ」

　ミシミシ。

「うぐぅぅ！ふごぉぉ！」

「ほら、ちゃんとお礼は？ 無価値なお前が、この私のお尻に潰してもらえてるのよ？ 感謝しなさい」

　光は楽しそうに笑いながら、お尻を左右に振る。

　むにゅん、むにゅんと小人を揉みながら楽しむとさらに体重をかけていく。

「ぐぅぅ！ふがぁぁ！」

（あぁぁあ！潰れる！）

「そう？ なら、潰れて？ お前がどうなろうがどうでもいいの。死にそうだからって退くつもりはないわよ？」

（あぐぅ！！）

　光が呟きとともに更にお尻に体重をかけると小人はミシミシと音をたて始める。

（苦しいです～！）

　小人は助けを求めて叫ぶが、それが届くことはない。

「ふふ、無様ね」

　小人の悲鳴を楽しむようにお尻を揺らしながら、光は嘲笑う。

　そして、しばらく楽しんだ後、満足したのか再び足を浮かせて座り直すと、小人はやっと解放されたのだった。

　--クソ！この小娘が！！ 尻の下から這い出ようとする小人だが……。

「誰が動いて良いといったのかしら？」

　ギュゥゥ！

「ふぐぅぅぅ！」

　小人を挟んでいた左右の尻肉が容赦なく小人を締め上げる。

（ぎゃあああ！）

　左右から万力の様に締めあげられ、骨が軋む。

「何逃げようとしてるの？ お前の居場所はここでしょう？」

　むにゅん。

　小人をお尻でプレスして、その感触を楽しむ光。

（苦しいです！）

「だから、お礼をいいなさいって言ってるでしょ？」

（誰が貴様なんぞに！！）

「ふふ、お前がモゾモゾ逃げようとするから、お尻がムズムズしてきたわね」

　光はクックッと笑うと左右の尻肉を器用に動かして、小人の身体を後ろへとずらす。

　やがて小人の顔はパンツ越しにとある場所へと追いやられた。

　布越しに顔が埋まるように小さな窪みがあり、そこに顔がはまってしまったのだ。

「うっ！？ くさっ！」

　パンツの匂い、蒸れたメスの香りとは別に僅かにただよう苦いような便臭。

　しめり、呼吸するようにわずかに揺れるのはーー。

「まさか……！」

　パンツ越しでも、小人はそこがどこか察した。

「ふふ、小人って便利よね。何をしても問題ないもの。死んでも問題ないのよ？ だって、虫を殺しても罪にならいでしょ？」

恐ろしい台詞を笑いながら言い放った光は一瞬、腹部に力を入れーー。